



若草物語 4姉妹

子供の頃に、『若草物語』を読んで、主人公ジョーに魅了されたのは私だけではないでしょう。四人姉妹の次女である主人公は作者自身をモデルとしたとのこと。ジョーの生きた世界は、キリスト教を基盤にし、自由と独立を求めて、自分らしく個性豊かに生きようとする人々の世界のように思えて、理想的に見え、憧れを抱いたものです。『若草物語』は少女小説と呼ばれて、多くの少女たちの愛読書となり、大ヒットしましたが、不思議なことにその他の彼女の作品を読むチャンスがありませんでした。

作者はアメリカ女流作家ルイザ・メイ・オルコット(1832 - 1888)です。年代的にはジョセフ彦(1837 - 1897)と同時代です。

日本でも純文学、大衆文学などのジャンル分けがありますが、オルコットの得意とした、というべきか、書かずにいられなかったジャンルはエンターテインメント、スリラー小説であったということで驚きました。なるほど、ジョーの性格、面影が浮かんでいきます。

『仮面の陰に』の主人公ジーンは貧しい女性ですが、美貌を武器に、年齢、経歴を偽り、淑女らしい学識、才能を用いて、独身男性の多い貴族の家に、娘の家庭教師として勤め始めます。ジーンは男性を虜にする上品な振る舞い、魅力的な仕草、柔らかい言葉、テキパキとした実務の能力などを用いて、家族の皆に気に入られていきます。男性は皆彼女に魅了されます。謎めいた雰囲気や嘘を用いて、男性たちの自尊心を巧みにくすぐり、嫉妬する恋心を利用し、彼らの疑心暗鬼を捌いていきます。ジーンは最後に、始めから狙っていた爵位を持つ初老の男性と見事結婚してしまいました。法的な結婚により、ジーンは地位、経済力を得て、満足するのです。あけすけに現代的に言えば、『仮面の陰に』は、「後妻業」という言葉を思い起こさせるものがありました。

『愛の果ての物語』の主人公ロザリンドは非常に美しいのに、家族の愛に恵まれない、孤独で、世間知らずの、野性的な少女でした。偶然家にやってきた男性の風貌、財力に惹かれ、家を出ていけるという願いが叶うことで結婚を受諾し、共に旅に出ます。ロザリンドにとってはすべてが新鮮で、興味深い、夢のような世界が開かれていきました。二人は愛し合いますが、実は男性には離婚訴訟中の妻があり、ロザリンドは情婦にされていたのです。罪深い、恥ずべき関係であることに打ちのめされ、騙した男性を受け入れられず、逃げ出します。ロザリンドを求める男性は執拗にどこまでも追いかけて行きます。これは「ストーカー」という言葉を想起します。

スリル満点のこれらの小説は、女の美貌に男は弱く、男の経済力に女は弱いというパターンです。ロマンスでありながら、性的描写は皆無であり、悪女のようなジーンも、無知なロザリンドも、性を問題にしていません。ただ、オルコットは男女の会話、対話を生き生きと面白く描いています。19世紀の英米社会でも、自由、独立は男性のものであり、多くの女性は父権的、倫理的、経済的「縛り」の中にあることが分かります。オルコットは結婚に期待するものはなかったようで、大衆小説を書くことで家計を支えるのに懸命でした。『若草物語』で経済的自立を果たし、社会的にも評価されたオルコットは時代を超えて、当時の女性の姿を映し出しています。